

ネイチャー・テクノロジー研究会シンポジウム

地域を創るひとを育てる 新しいライフスタイルと教育の観点より

孫が大人になったときにも光り輝くまちづくり！
東北大学名誉教授 石田 秀輝氏
地球村研究室代表

基調講演 孫が大人になったときにも光り輝くまちづくり！
東北大学名誉教授 石田 秀輝氏
地球村研究室代表



昨年から小学6年生の国語の教科書に、私がネイチャー・テクノロジーの概念をまとめた「自然に学ぶ暮らし」が掲載されている。子どもたちから手紙を読むと「環境のために我慢」という意識が強い。厳しい地球環境の中で、我慢しながら生きていく。80年代半ばから、物より心の豊かさを求める人がどんどん増えている。

依存と自立の間を埋める技術力

モノづくり日本会議は6月23日、東京コンファレンスセンター・品川（東京都港区）でネイチャー・テクノロジー研究会シンポジウム「地域を創るひとを育てる」を開催した。地方創生が国を挙げて推進されている。自律的かつ持続的な地域の構築には、未来を担う次世代の参加が不可欠だ。地方創生の「ひと」に着目し、自律的な地域社会の構築を担う多様な「ひとづくり」への取り組みを議論した。

地域の心豊かな人づくり

三重県立宇治山田高等学校教諭 牧田 平氏

私は6年前に定年退職、再任用を経て、今年4月から時間講師を務めている。教員生活のスタートは1974年の度会高校。生徒を大切にすることを一番の目標として現場に臨もうと思った。度会高校は生徒数300人に満たない小さな学校だ。そこで出会ったある先生の「教員はサービス業。本気で生徒と向き合おう」という言葉が、私の心に残っている。

教員はサービス業 生徒と向き合い共育

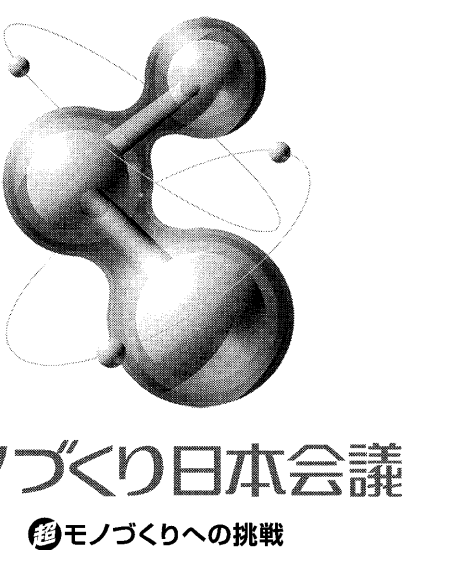
文化や芸術で地域を振興する人づくり — 公益財団における人材育成

福武財団事務局長 金代 健次郎氏

ベネッセアートサイト直島の直島に年間50万から70万人が訪れている。そこに住んでいる人がこの直島文化村と公益財団の3組織で行っているアート活動の総称だ。瀬戸内海の五つの島々に16の施設、アートサイトを設け、その場所の歴史や民俗を発見し、島の人は誇りを、文化や芸術による地域振興や、イベント中心の活動において持続性が求められる。人口3200人の島に、文化や芸術による地域振興や、イベント中心の活動において持続性が求められる。



福武財団事務局長 金代 健次郎氏



地域社会の未来をひらく「場」の創造

富士ゼロックス 復興推進室長 樋口 邦史氏

当社は東日本大震災発災後、盛岡に拠点を構え、被災地を支援する活動を行った。被災地となった沿岸地域に対する復興推進活動を行った。その結果、遠野市長から被災地の後方支援拠点としての遠野市を研究し、遠野の未来を一緒に考えようという話があり、「みらい創り」活動がスタートした。

対話重ね共創をマネジメント

パネルディスカッション

- 石田 登壇したお三方に加え、古川さん、木村さんをお招きし議論を交わす。
- 古川 社会技術開発センターに採択されたプロジェクトでは、環境制約を踏まえた新しい暮らしの価値を生み出すための手法の実証に取り組んでいる。制約の中の豊かさを学び取る90歳ヒアリング、バックキャスト思考によるライフスタイルデザインの一つの手法が柱になる。
- 自治体と協働しながら地域への手法導入に時間をかけ、地域で自立してみようという考えを回す授業からライフスタイルを描ける心豊かなライフスタイルを構築する「をテーマにして考える」をテーマにして持続可能な社会に向かうことを目指している。
- 心豊かな暮らしは地域の自然環境に依存してお互いに考えを話し合う。地域ごとに異なるものを、地域ごとに整理し、外部からの押し付けではなく、90歳ヒアリングは地域に入るための有効なツールになる。
- 木村 4年前にハウスメカニカルを定年退職し、大学に移った。近畿大学には1年生のときに基礎ゼミナールとして基礎ゼミナールシナリオに基づいたパッシブデザインの実験住宅や動力を使わない換気などに取り組んでいる。
- 石田 講演いただいた皆さんに共通しているのは、目標を地域に合わせるということ。難しさをどうやって乗り越えていくのか。
- 金代 半歩現実・半歩未来という感じだ。あまり中に入らない、あまりとんでもない提案をしないという、間合いが非常に大切だ。
- 樋口 地域社会に分かりやすい表現、伝え方が重要。報告会などで今後のことを共有していったことが一番のポイントだった。
- 金代 地域に入るために重要なことは、地域の人の生活、文化をどれだけ深く理解するかだと思う。
- 樋口 それは絶対に許せない。もう1点は、地域社会の人たちと一緒にどうやって行動を起こすこと。
- 石田 教員はサービス業だと言ってしまうと教員は少なくなってしまうように思う。
- 牧田 私は先輩の姿を見て、自分も実践してきた。うちの学校では最近になり少しずつ増えてきた。
- 石田 人間くさくやらないうちが大事ですね。
- 木村 大学には学生と寄り添う体質はあまりないと思うが、企業出身者が大学に入ることで徐々に変わってきているように感じる。
- 石田 最後に、何を求めて今の仕事をしているのかひとこと。
- 古川 日本のよさが地域にいつまでも残る。深いところにある価値を残し、未来に向けて変換していきたい。
- 木村 セロ・エネルギー・ハウス（ZEH）というベクトルでよいのか。違う解決方法を生み出さなければいけないと考えている。
- 樋口 とにかく震災が起きる前に、自分しかできないことをやり続けたいと思う。
- 金代 地域社会に入っていくということは、求められるレベルが企業と全然違う。そこにおもしろさがある。
- 牧田 生徒には、胸躍するような仕事に就けるようによく勉強して、職を選ぶように話をしている。
- 石田 とれど技術が発展しても、原点は人です。ありがたうございます。

目的意識の醸成がポイント

目的意識の醸成がポイント



教育から考える、心豊かな地域の未来への道程

木村氏 古川氏

目線を地域に合わせ、間合い・伝え方が重要

目線を地域に合わせ、間合い・伝え方が重要



「モノづくり日本会議」は、2007年9月に設立した「モノづくり推進会議」での活動を土台に、広域企業ネットワークや他機関との連携を活用し、日本のモノづくり産業の強化に役立つ実践的な勉強会・シンポジウムなどのイベントや交流会などの活動を展開しており、日刊工業新聞社が事務局を務めている団体です。

「モノづくり日本会議」は、2007年9月に設立した「モノづくり推進会議」での活動を土台に、広域企業ネットワークや他機関との連携を活用し、日本のモノづくり産業の強化に役立つ実践的な勉強会・シンポジウムなどのイベントや交流会などの活動を展開しており、日刊工業新聞社が事務局を務めている団体です。...